

楽器レッスン場面における生徒の聞き手行動： いつ「はい」と言い、いつ「うん」と言うのか？ “Hai” or “Un”: A Study of Students’ Response Behaviors during Instrumental Lessons

横森 大輔

Daisuke Daisuke

九州大学

Kyushu University

yokomori@flc.kyushu-u.ac.jp

概要

本研究は、教育活動において生徒がどのように聞き手行動を用いてその場の相互行為を構築しているかを明らかにすることを目的とし、楽器レッスンにおける生徒の「はい」と「うん」の使い分けを分析する。楽器レッスンの録画データから「はい」と「うん」の事例を収集し、会話分析の研究手法を用いて分析した結果、「はい」はどのような演奏が望ましいかを述べる発話に対して反応する際に用いられるのに対し、「うん」は、楽曲についての説明やデモンストレーションに対する反応として用いられていることが明らかになった。

キーワード: 聞き手行動, 教育活動, 楽器レッスン, 「はい」, 「うん」, 会話分析

1. はじめに：教育活動と聞き手行動

人間のコミュニケーションにとって、情報を発信する側の発話や振る舞いだけでなく、情報を受け止める側による相づち等の「聞き手行動」も重要な一部である(高梨・榎本 2009)。中でも、教育活動におけるコミュニケーションは、聞き手行動の重要性が顕在化しやすい領域である。教育活動は、教師から生徒への知識・技能の伝授という目的を指向して活動全体が組織されており、結果として、活動の中核が教師による発話と、それに対する生徒の聞き手行動で構成されることが一般的だからである(cf. Mchoul 1978)。そのような場における聞き手行動は、教師にとっては、指導に対する生徒の受け止め方や当該の教育活動の順調さを知るために注意すべき対象であり、生徒にとっては、発言機会が制約されている中で、指導内容に関する理解状態や潜在的な問題を陰に陽に伝えることができる、有用な手段である。本研究は、教育活動において生徒がどのように聞き手行動を用いてその場の相互行為を構築しているかを明らかにすることを目的とし、楽器レッスンにおける生徒の「はい」と「うん」の使い分けを分析する。

2. 「はい」と「うん」

ともに肯定の意味を表す反応表現「はい」と「うん」は、『日本国語大辞典』等にもあるように、目上の相手に対しては丁寧な形式の「はい」を、目上以外の相手には「うん」が用いられる、と区別されるのが一般的である。一方で、両者の違いが丁寧さだけに帰せられるわけではないことも指摘されている(富樫 2002)。

高木(2008)は、治療的面接場面において経験豊富なカウンセラーが「うん」と「はい」をどちらも使う点に着目し、相互行為を先に進めることの妥当性が焦点化された局面において「はい」が用いられることを記述している。

また山本(2016)は、インタビュアーがインタビューの話を受け止めるのに「うん」と「はい」をどちらも用いているインタビュー場面を検討し、インタビュアーが自身の発話に生じた語句について補足説明を挿入するとインタビュアーが「はい」で反応するという規則性を報告している。

高木(2008)と山本(2016)はいずれも、「うん」が頻繁に用いられる場面の中で聞き手が敢えて「はい」を選択する相互行為上の要因を検討している。しかし、教育活動という制度的場面に特有の事情として、生徒は教師の言葉に対して「はい」と返事をするのが強く期待されている(cf. 松田 2011)という点が挙げられる。本研究では、先行研究の知見を踏まえつつ、楽器レッスン場面だからこそ観察できる「はい」と「うん」の特徴を明らかにする。

3. データと方法

本研究が分析に用いるのは、楽器レッスン5場面(合

計約 5 時間) の録画データである。内訳は、ピアノレッスン 4 場面 (同一のピアノ講師によるもので、生徒は全て異なる) とチェロレッスン 1 場面で、全てクラシック音楽の楽曲演奏を指導するものである。生徒はいずれも成人で、5 名のうち 4 名が講師よりも年長者である。生徒の演奏技能の習熟度は、経験 3 年ほどの初級者から音大卒業者までと多岐に渡っている。レッスンはいずれも講師 1 名に対して生徒 1 名で行われた。なお、これらは実験室環境で収録されたものではなく、実際の教室において各生徒が定期的に受講しているレッスンを収録したものである。

各レッスン場面の概要とそれぞれの録画データにおける「はい」と「うん」の生起回数を表 1 に示している (Pf はピアノを、Vc はチェロを表す)。「はい」と「うん」の生起回数については以下の点に注意されたい。「はいはい」「うんうんうん」など一続きで産出されたものはまとめて 1 回として数えた。発音が曖昧で、「はい」や「うん」であることが不確かであるものも含めている。本研究の対象である、相手の発話を受け止めたことを示す用法だけでなく、講師による Yes-No 質問への回答として用いられたケースも含めている。

表 1 レッスン場面の概要と「はい/うん」生起回数

	楽器	生徒の年齢	生徒の経験	時間 (分)	はい	うん
1	Pf	年上	約 3 年	44	110	15
2	Pf	年上	約 10 年	54	102	46
3	Pf	年上	約 30 年	53	63	14
4	Pf	年下	音大卒	55	90	9
5	Vc	年上	約 20 年	75	59	32
			(計)	281	424	116

収録されたデータから「はい」と「うん」が聞き手行動として産出された事例を収集し、会話分析の研究手法 (Sidnell 2013) を用いてこれらの聞き手行動がどのような相互行為環境で利用されているか探索した。

4. 結果と考察

分析の結果、「はい」は、教師がどのような演奏が望ましいか (あるいは望ましくないか) を述べる発話に対して反応する際に用いられていることが確認された。例えば、以下の(1)では音量の落とし方について、(2)ではテンポについて、どのように演奏するのが望ましい

かを教師(T)が言明すると、生徒(S)が「はい」で受け止めている。

- (1)
01 T: このディクレッションドをもっともっと
02 (0.4)
03 T: デリケートにね
04 (0.2)
05 S: はい.

- (2)
01 T: いま弾いてるより
02 (0.4)
03 T: 2 目盛りくらい遅い[方がやりやすいと思うね
04 S: [hh
05 S: はい.

それに対して「うん」は、教師による楽曲についての説明や、デモンストレーション (弾いてみせること) に対する反応として用いられていることがわかった。以下の(3)と(4)のいずれも、教師がデモンストレーションを行い、さらにそれを文の一部に埋め込むように言葉を続けて説明を行うと、生徒が「うん」で反応している。

- (3)
01 T: この{ ♪演奏 ; 9.6 秒
02 っていうこの[ずーっとこれが
03 S: [うん.

- (4)
01 T: { ♪演奏 ; 6.9 秒 } を表してるみたいな、
02 (0.2)
03 S: [うん.
04 T: [そういう感じかねえ
05 もう[1 回出だし 3 段目くらいまでねえ
06 S: [はい.

(4)の事例が興味深いのは、3 行目で「うん」で反応した生徒が、教師の「そういう感じかねえ」という、直前までの説明に言及して総括を行う要素の追加の後に「はい」を産出している (05 行目) という点である。高木 (2008) や山本 (2016) の分析は、「はい」が、相互行為を先に進めてよいかどうかを交渉する際に用い

られるということを示唆しているが、本研究の結果はこれと整合的である。すなわち、レッスン場面において、どのような演奏が望ましいかを教師が言明し、生徒がそれへの理解を表明したなら、レッスン内の下位タスクが一つ完了したことを意味し、レッスン活動を先に進めることになる。このように、楽器レッスンにおける生徒の「はい」と「うん」を精査することにより、聞き手行動に関して、場面固有の特徴と場面横断的な特徴の両方についての考察を得ることができる。

会話断片に用いた記号

- (0.2) 無音区間 (数値は秒)
 [発話の重なり
 .hh 息を吸う音
 {♪演奏; 9.6 秒} 楽器演奏が 9.6 秒間続いている

謝辞

楽器レッスン場面の収録にご協力いただいた西田絃子氏 (九州大学) ならびにデータ整理作業にご協力いただいた安部みなみ、阪上芽以、坂尾結衣の各氏 (九州大学学部生) に感謝いたします。本研究は、JSPS 科研費 17H00914 および 20K13007 の助成を受けたものです。

文献

- [1] Mchoul, A. (1978) "The Organization of Turns at Formal Talk in the Classroom," *Language in Society* 7(2), 183-213.
- [2] 松田哲 (2011) 「「返事の強制」と理解の相関に関する実験：スポーツ・コミュニケーションの試み」, 『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』 4, 13-20.
- [3] Sidnell, J. (2013) Basic Conversation Analytic Methods. In Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.) *The Handbook of Conversation Analysis*, 77-99. Oxford: Wiley-Blackwell.
- [4] 高木智世 (2008) 「相互行為を整序する手続きとしての受け手の反応：治療的面接場面で用いられる「はい」をめぐって」, 『社会言語科学』 10(2), 55-69.
- [5] 高梨克也・榎本美香 (2009) 「特集「聞き手行動から見たコミュニケーション」編集にあたって」, 『認知科学』 16(1), 5-11.
- [6] 富樫純一 (2002) 「「はい」と「うん」の関係をめぐって」, 定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』, 127-157. 東京：ひつじ書房.
- [7] 山本真理 (2016) 「相互行為における聞き手反応としての「うん/はい」の使い分け：「丁寧さ」とは異なる観点から」, 『国立国語研究所論集』 10, 297-313.